The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	第一章　近代工芸運動
Author(s)	高安, 啓介
Citation	a+a 美学研究. 2017, 11, p. 11-13
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/90130
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

第一章　近代工芸運動

近代工芸運動

西洋の文脈において近代デザインというとき二通りの理解がある。広い意味での近代デザインは、一九世紀後半から始まる革新運動であり、ウィリアム・モリスないしはアーツ・アンド・クラフツ運動がその出発点とみられる。けれどもかれらの仕事を知るならば、私たちは次のような疑問をいだくだろう。モリスは機械生産を批判するとともに中世の手仕事を理想としたのに、モリスはなぜ「近代デザインの父」とまで呼ばれるのかと。その理由はもちろん、工業化にともなう問題の解決に取り組もうとしたり、過去の様式の模倣ではない新しい装飾をもたらそうするなど、前向きなところもあったからである。これにたいして、狭い意味での近代デザインは、二〇世紀初頭に起こった近代運動とその産物をいう。狭い意味での近代デザインは、合理主義の思想によって知られるデザインであり、無装飾の簡素さによって知られるデザインであり、バウハウスに代表されるデザインである。こちらのほうは、抽象絵画からも刺激を受けながら、工業生産に前向きに取り組み、直線を基調とする構成によって特徴づけられる。

狭い意味での近代デザインをいう場合、一九世紀からの前史はいうならば近代工芸運動であった。なぜならそれは、工芸の意義を見直すとともに、工芸の革新を目指した運動だったからである。たとえばアーツ・アンド・クラフツ運動をはじめアールヌーボーもこれにあたる。二〇世紀日本における民藝運動はいくぶん遅れてきた近代工芸運動として独特である。柳宗悦はモリスの理想をかなり引き継いでいるが、民藝運動の当事者たちはモリスらの作品をあまり評価しなかった。時代からしても、民藝の品々はむしろ狭い意味での近代デザインと通じていた。柳宗悦の息子である柳宗理が、戦後日本の工業デザインの発展において大きな役割を果たしたのは、自然な成り行きだったと考えられる。

以上のように、多くの国々において近代工芸運動というべき事象がみとめられるかぎり、各国のデザイン史の焦点となるのは、一九世紀から二〇世紀にかけて、近代工芸運動がどのように近代デザイン運動のうちへと解消されたのかという点である。すなわちこの移行過程のなかで、何が継承されたのか、何が克服されたのか、文脈にそくして解明されなければならない。ペヴスナーの一九三六年の『近代運動の先駆者たち』はデザイン通史の「先駆」として名高いが、副題には「ウィリアム・モリスからヴァルター・グロピウスまで」とある。この書名が一九四九年に『近代デザインの先駆者たち』と変わっても副題はなお残された。ペヴスナーのこの本の記述は一九一四年までである。すなわち、狭い意味での近代デザインの前史をあつかっており、近代工芸運動がいかに近代デザイン運動をうながしたのかを解き明かした書物だった。

（高安啓介）

参考文献

藤田治彦編『近代工芸運動とデザイン史』（思文閣出版、二〇〇八年）。
藤田治彦編『アーツ・アンド・クラフツと日本』（思文閣出版、二〇〇四年）。
藤田治彦『ウィリアム・モリス―近代デザインの原点』（鹿島出版会、一九九六年）。

共同研究

藤田治彦　科学研究費　基盤研究（A）二〇一一―二〇一四年度
アーツ・アンド・クラフツと民藝―ウィリアム・モリスと柳宗悦を中心とした比較研究
藤田治彦　科学研究費　基盤研究（B）二〇〇四―二〇〇六年度
近代工芸運動の総合的国際比較研究